
転生する話

雷歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生する話

【Nコード】

N4016Q

【作者名】

雷歌

【あらすじ】

この物語は、主人公がリボーンの世界に転生して、ハチャメチャにするという全く理解不能であろう物語である。下手すりゃ主人公最強という、作者の妄想と、多少の原作を交えての物語なのだ。

標的 +a 登場人物紹介 〈オリキャラ〉

オリキャラ
〈登場人物紹介〉

拝啓、読者の皆さま。初めまして：でしょうか？雷歌です。
今回は、『転生する話』のオリキャラを紹介しようと思い、
紹介できるようなことも無いですが、とりあえずやってみました。

そうそう、これをやって初めて、オリ主の本名出してないことを
知りました。

浅架 由宇 アサカ ユウ (??歳)

性別 女

血液型 AB型

生年月日 12月11日生まれ

性格 男らしい。しかし、少しだけだが乙女心も持っている。
る。

割とサッパリしていて、クールなタイプ。

暴言などはすぐ吐く毒舌少女。

才色兼備。容姿端麗。スポーツ万能。

男女から人気がある。

S だけどM。

好きなもの 可愛いもの。(リボーンは特に)

格好良いもの。（獄寺とか雲雀さんとかタイプ）

嫌いなもの 可愛くないもの。

格好良くないもの。

今の願い 元の世界に戻りたい：

設定 知らぬ間に神の前に立たされ、いやいや転生させられ、何故かそれを楽しんでしまう。理解力があるとするには、少し才能がありすぎる気がする。

有川 零 アリカワ レイ （13歳）

性別 男

血液型 AB型

生年月日 3月9日

設定 リボーンの世界に元からいる少年。心優しい性格だと推測される。

写真を見ても、少年っぽさが残る可愛らしい少年。
だが：

神よ、ワタシはお前を殺してやる

別に予想していた訳じゃないし、驚かない訳でもない。たとえばぐ目の前に神が立っていても、その神が自分に頼みごとをしていようと、だ。むしろ驚いて当たり前だろう。っていうか、これを現実だとは思わないさ。本当に飛ばされるまで。

「…という事で、お願いするぞ」

満面の笑みでそう言いながら手を振る神。その様子にワタシはぶちギレル。

「な…なあにが『という事で』だ!!! ちゃんと説明しろこのハゲエエエ!!!!!!」

その怒鳴り声を聞いた神は、しょんぼりとうなだれる。それでもじもししながら言った。

「だってさあ：アイツに頼まれたからにはのう、断れんのじゃ」

「アイツって誰さ!？」

「アイツは、アイツじゃ。強いて言うならこの世界とは別の世界を統率する神じゃ」

「別の世界って？」

「そうじゃの：これからお主が行く世界、とだけ言っておこうかの」

さらっと、普通に、当たり前のように変な事を言い出した神。そ

んなことが納得いかないワタシ。

「…たとい神であろうとも、お前を殺してやる」

「それは無理じゃの。神は外部からの攻撃によって死ぬことはないからな」

「じゃあ、お前が死にたいと思うまで痛めつけてやる」

「無理じゃ無理。お主ごときの力でワシが死にた…」

「それでもぶっ殺してやる」

少し落ち着きを失っていたワタシは、とりあえず力のままに怒りをぶつけた。

「えー、少しは落ち着いたかのう？」

「………」

「とりあえず、お主には『転生』してもらおうぞ」

「………」

「…してもらうからの。お主が何と言ってもじゃ」

「………」

「………」

「………」

「ええい！何じゃこの沈黙は！言いたいことがあるならとつと言わんか！」

しびれを切らした神が叫ぶ。そして静かにワタシは言った。

「『転生』したくない」

要点をまとめて、簡潔に、分かりやすく、しかし悪意と怒りをあらわにして言った。

「ダメじゃ。もう転生の準備は整っておる。今は元の世界に戻ることは出来ん！」

「『今は』？いつなら戻れる？」

「お主が役割を果たしてからじゃ」

「……」

「……」

「……」

「何故お主は黙りこくるのじゃ！！ワシの心に罪の意識が芽生えてしまうではないか！！！」

「なら罪を感じて、このまま元の世界に返せ！！！！！」

「無理じゃ！！！」

「何で！！！」

「無理だからじゃ！！！」

「何がだ！！！」

「お前は、もう死んでおる！！！！！」

「死んだ覚えはなあーい！！！！！」

ぜえ、ぜえ、と息を荒くするワタシと神。

「と、とにかくじゃ…お主が役割を果たせばもう、元の世界に戻せる」

「そ…そのや、役割っていうのは何だ？」

「それは、

「家庭教師ヒットマンREBORN!」^{かてきよー}の世界に転生して、
そこで生活することじゃ」

「…は？」

「ひふへほ？」

ふざけんな、神。ワタシは思いっきり神の顔を殴った。

「痛いもう…」

神は殴られた頬をさすりながら言った。

「とにかく、じゃ。お主には『転生』してもらう」

そう言いながら神は、いかにも仙人が持っているような杖を出した。突然それは光を放った。

「え、ちょっと、何？」

ワタシに有無を言わせない勢いで、『転生』させられてしまった。

神よ、ボクはお前をぶっ殺す

気付いたら、全く知らない部屋のベッドにいた。

「…あの神、絶対ぶっ殺してやる」

誰もいない空間にそう、一人呟いて部屋を出ようと思った時、机の上に手紙があることに気が付いた。

『はろー☆

神じゃ。元気に目覚められたかの？時々目覚めないものがあるからなあ…』

あんにゃろ、本気で殺してやる。

そして続きにはこう書いてあった。

『諸注意じゃ、よく聞けよ?』

聞くんじゃなくて、見るだから。

『一、お主の名前は 有川 零^{ありかわれい}』

一、お主は今日付けで 並盛中学校1－Aに転入じゃ

一、時間軸は、リボーンがやって来るあたりじゃ（最初のあたりじゃな）』

その他諸々が書いてあった。あ、そう。と思いながら時計を見た。7時45分：学校ギリギリじゃないか？そう思いながらクロゼットを開けてみる。ワイシャツ、学校指定であろいうベスト、そして、学校指定であろいう制服のズボン：スカートじゃなくてズボン？

神からの手紙を読み返す。そしたら、下の方に、本当に下の方に小さな小さな文字で、

『実はもう、手違いで有川零は男なのじゃ…すまんのう』

ハッ、神よ死ね。死んでしまえ。まさかワタシを男と勘違いしたとかは言うまいな？

『ぎゅっ　らいと★じゃ。いやあ、本当にすまんのう』

てめー、絶対謝る気などないな！？

『またまたざっつ らいと★★★じゃぞ』

その瞬間、ワタシの手に握られた手紙は、クシヤクシヤになっていた。

—————元の世界に、戻るため……

ワタシ—————もとい、僕、ボク、俺？はそう自分に言い聞かせた。

制服に着替えようとして、その手を止めた。急いでまた、神からの手紙を読み返す。

そこには、隠すように書かれている文字があった。

『手違いは 一つだけとは 限らない

そんな神様 どうかゆるして

実は性転換するの、忘れて…というか必要ないと思っ
ての
う…』

短歌か貴様！本気でぶっ殺す！！！！

短い髪は元からそうだった。女子にしては背が高いこともそうだ。
しかし、それだけで女であることを隠しながら生活をしろと！？そ
んな苦痛を強いるのか神よ！！

『ざっつ らいと★★★じゃ

男子ライフをえんじよいしてくれ』

あれが神で良いのだろうか。あんな○△^{ビー}#で¥^{ビー}#○▼な爺が、神で本当に良いのか？

※多少言葉は自重しています

そう心の中で呟いて、仕方なく制服に着替えて家を出た。

標的1 主要人物と、接触

「転校生を紹介する。有川零君だ」

担任がそう紹介した後に、零は口を開いた。

「よろしくお願いします。海外生活が長くて、少しなれない部分もあるので仲良くして下さい」

零がそう言いながら微笑むと、クラスの女子がざわざわと騒ぎ始めた。

「ねえ、すごい格好良くない？」

「優しそうだし」

「超タイプなんだけど」

—————
何で女が女子から好かれなきゃいけないのさ…

無論謎の転校生に、休み時間など皆無であった。

「ねえ、海外ってどこに住んでいたの？」

「ねえ、趣味は？特技は？」

「どんな事が好き？」

「どんな子が好み？」

毎回の質問攻めに、人付き合いが得意だった零にも疲れがたまる。その度に励ましてくれるのが、隣の席の『沢田綱吉』だった。

「大変だね、大丈夫？」

「：ありがとう。大丈夫です」

「ねえ、イタリアから来たって本当？すごいね」

「本当です。生まれも育ちもイタリアです。両親は日本人ですがね」

「へえ」

鋭い殺気を感じるのは、沢田綱吉に対する女子からの視線。それをなんとも感じない分、沢田綱吉は度胸が据わっている。

———いや、鈍感なだけ、かな

「じゃあ、明日」

「はい。また明日」

そう言って零と沢田綱吉はそれぞれの帰路へついた。

———まいったな：REBORN！の原作、あんまり知らないんだよな…

帰り道は、ずっとその事ばかりを考えていた。その途中、ある変化に気が付いた。誰かが、零をつけている。

———転生のおかげかな、勘が冴えている

必死に撒こうと歩き回るが、相手にはかなりの慣れが伺える。ちつとも撒けそうにない。そこで零は賭けに出た。

「ねえ、誰？ボクのことつけてるの」

零が振り返ってそう言っても、誰も出てこなかった。

「フン、このオレの尾行に勘付くとは、なかなかの奴だな」

ただそう言い残して、気配を消した。

「ふうん」

零もそう言って、また家路についた。

家に帰ってきた零は、隅々まで見てまわった。経歴を聞いているも《有川零》を演じるには、不十分であった。本当の《有川零》の思い出の品や、その性格を示す物まで、実に様々な物を見つけた。アルバムや手紙などがあったが、その中でも「ぼくのたからもの」と書かれた箱の中には、他愛もない、しかし一つ一つが輝いて見える物がたくさん入っていた。ミニカーや絵、きれいに光る石や壊れたペンダント。

この様子だと《有川零》は優しい少年なのだろう。零は、できるだけそれに沿って生活しなければならない。零が元の世界に戻るその日まで。

次の日の朝零が起きた時、机の上にまた手紙が置いてある事と、その隣にダンボール箱が置いてあるのが目に入った。

———あの神か…？面倒臭い

そう思いながら手紙を読んでもみると、そこにはムカつく文章が。

『ハ—イ☆神じゃよう。元気かう？？』

昨日お主が、『まいったな…REBORN!の原作、あんまり知らないんだよな…』とか思っていたので、原作の漫画を送っていたぞ。』

神よ、もっと良い物を送れ。っていうか元の世界に返せ。

今日も零には、神への怒りが積もるだけなのだった。

標的2 サイキョーのヒットマン、現る

零が転入してから一週間。沢田綱吉とは上手くやっている。学校生活では男を演じ続けていたが、もともと男っぽい性格なので、あまり辛くはなかった。神が間違えたのも、多分この所為だ。多分。いや、その所為であるならば許すぞ、神。見た目が男らしかった訳ではないと言え。

神が送ってきた原作漫画、一応手元にある分は読み終えた。実際の沢田綱吉と接触している分、原作が分かりやすかった。

————あれがマフィアのボスとは、思えないよな：

そして今日は一番大事な日である。沢田綱吉とリボーンが接触する日。今までの零なら、そんなこと関係なく過ごしていただろう。だが漫画を読んだ今、リボーンに会ってみたいと思うのは、ファンの性である。零も例に漏れない。だから朝早くから沢田綱吉の家の前にいるのである。

電柱の陰に隠れている姿は、まるでストーカーだ。そのまま沢田綱吉の家を見ていると、一人の赤ん坊が近づいてきた。

——————おお、あれがリボーン！！かぁいい！！超かぁいい！！！！！！

だが、リボーンは手紙をポストに投函すると、零の方へ近付いてきた。そして銃を構えてこう言った。

「んな所に何隠れてやがる。お前、どこのファミリーの奴だ？」

モットモである。こんな朝っぱらから、人ん家の前に隠れてるなんて実に怪しい。

「え、あ、と、その、えーつと…」

「ハッキリしろ」

「はいいつつ、さ、沢田綱吉君に用事がありまして…そ、それで…」

「それで？」

「待っていただけです」

「ヒットマンに嘘をつく…」

「嘘じゃないですううう!!!」

言い知れぬ威圧感に、零はその場を立ち去った。いや、走って逃げてきた。

———恐るべし、呪われし赤ん坊……
アルコバレーノ

若干素が出てしまったが、学校での『優しくて格好良く、頭も良くてスポーツもできる』という完璧キャラは崩したくないので、登校する前に表情と心を整える。そして、少し早めだが学校に向かう。何となく歩いていると、零が今来た道の方からドドツ、と音がした。不思議に思って後ろを振り返るとそこには———

沢田綱吉が、パンツ一枚と額に炎という格好で勢い良く走ってきた。

「!!!!!!!!!!」

綱「うをおお!! 笹川京子に死ぬ気で告白するう!!!!!!!!!!」

彼が去った後にはポカーンとした零の表情しか残らなかった。そして気付く。

「あああ!! 沢田綱吉の告白って今日!?!」

零は、楽しみにしていたシーンを見逃したのだった。

標的3 ジ・エンド・オブ学校、とワタシ

零が学校に着いた頃には、既に沢田綱吉は笑い者だった。

「うゝうゝ…もうだめだあ」

沢田綱吉は机の上でうなだれている。そんな彼を、零は励ましていた。

「大丈夫です。勝てばいいんですよ。勝てば」
「それができたら苦労しないよ…」

沢田綱吉はそれからもずっと落ち込んでいた。零は性格が悪い。結果を知っている上でそれきり励ましもせず、沢田綱吉が落ち込んでいる姿を楽しんでいた。

良い友達でいなくては、という事も忘れてただ笑っていた。

何とか沢田綱吉は先輩に勝ち、零も死ぬ気モードの沢田綱吉を間近で見ることができた。零はそれだけで満足だった。

「転校生を紹介する。イタリアに留学していた獄寺隼人君だ」

先生が紹介すると共に女子が騒ぎ始める。

「ちよつとお、超カッコよくない？」

「おまけに帰国子女よ」

「有川君と同じイタリアだって」

————ワタシだってみんなと一緒に騒ぎたい：

自分が女子であることを隠している零にとって、少し辛い光景だった。ある意味沢田綱吉にとっても辛い光景だった訳だけれども（笹川京子のみに関して）

時間も過ぎ、いよいよ球技大会である。リボーンが余計なことをしたせいで、全く練習もしていない零が試合に出された。身体も女子であることを隠すのは、至難の業だ。とりあえずTシャツを中に着て、ぶかぶかで大きめのジャージを借りた。見た目は、問題なくなった。貧乳はこんな時に役立つ。

————…そりゃあ今はね、貧乳万々歳なんだけどさ？女子としてこれは：

そんな悲しみを抱きつつも別の事を考える。もう一つの問題、バレーを出来るか、である。経験は無くも無いけど、男女の運動神経

の差と言うか、そういうものがどうなるのかが心配だ。

—————男子の中にも一部例外（注…沢田綱吉）もいるし…

そう思って体育館に向かったのである。

試合の中で、零はまあまあ活躍していた。男子（一部例外（注…山本武））にも勝る運動神経、である。そんな零たちには、女子からの声援がすごかった。

「山本く〜ん！頑張ってえ！！」

「きゅ〜、有川く〜ん！」

「うわぁ、スゴ〜イ！」

—————ワタシもあっちに行きたい…

試合も中盤戦。少々負けているが、まだまだ逆転のチャンスはある。しかも、あわよくば…と思ってちらりと彼を見る零。そろそろ彼が死ぬ頃だ、沢田綱吉が。試合に戻りゲームを始めると、その瞬間は訪れた。かすかな銃声と共に、沢田綱吉に向かって何かが飛んできく。他の人は気付かないほど僅かな時間の間に、沢田綱吉は撃たれた。零に見える理由は、転生の影響が撃たれることが分かって

いたからだろうか。

球技大会も問題なく終わり、零は更衣室がいっぱいになる前に着替えに行った。

———とりあえずTシャツを着替えちやえば平気でしょ…

そんな軽い気持ちで着替えていて、後ろの気配に気付かなかった。

「お前、女なのか？」
「え？」

零が振り返ってみるとそこには、帽子を深くかぶった赤ん坊——

リボンがいた。

標的4 コンチキショウ、神の奴

静寂に包まれる室内。零は驚きを隠せなかった。

「…とりあえず、服、着ても良い？」

「…ああ」

制服に着替え、零とりボーンは話し始めた。

「何で男の格好なんかしてるんだ？」

「それは…」

零は言いよどむ。流石に「異世界から来た人間です☆」なんて言えない。とりあえず、

「有川零の身代わりをしている」

「身代わり…何故だ？」

そんな話をしていると、人が更衣室に入ってくる。

「あれ、有川？」

「お疲れ。何してんだ、一人で？」

着替えに来た男子生徒たちだった。流石に着替え終わっている零が、椅子に座り込んでいたら怪しい。

「あ、ちょっと疲れちゃって…」

「そうだな。有川、頑張ってたもんな」

「あなたも、お疲れ様です。では」

そう言って外に出た。更衣室の外にはさつき姿を消したリボーンがいた。

「話、後で沢田綱吉の家に行くよ」

「ああ」

「じゃあね、アルコバレーノ」

「お前!!」

リボーンが零に何か言おうとした時、既に零の姿は無かった。

「アイツ…何者だ？」

既に獄寺隼人は沢田綱吉に負け、先輩三人組をボッコボコにしていた。

「いい眺めだ」

屋上から見ていた零は、独り呟いた。

『趣味が悪いのう…』

いきなりムカつく声がする。

「な、クソ爺どこに居るんだ!？」

『どこって、ここ』

「ここって言われて分かるかボケェ!！」

『お主がこの世界に来る前に一度ワシと会ったところじゃ』

「ここじゃないじゃん!！ってかどうして声が聞こえんだ!！」

『転生の時の常識じゃろ』

「じゃあ今までの手紙とかは…」

『何となくな、そんなことをしてみたかったのじゃ』

「……………」

『……………』

「……………」

『何で黙るんじゃ!！』

「ぜってえ、殺してやる」

『とにかくな、この世界について言い忘れたことがあったの』

「何だ？」

『せっかく漫画読んでもらったところ悪いんじやが』

「何？」

『この世界アニメ版のほうなんじや。しかも原作はほとんど関係ないんじやよ』

「…意味わかんないし」

『ほとんど……の妄想じゃからな』

「聞こえなかったんだけど」

『気にするな。きちんとサポートしてやるからの』

「どういうことだ？」

『とりあえず後でな。では、またのう』

「おいクソ爺!!」

意味の分からないことを言って、クソ爺…神の声は聞こえなくなった。

「あ、沢田綱吉のところに行かなきゃ」

思い出したように、零は沢田綱吉の家に向かった。

標的5 スカウトされました、ボク

零は今、普通の一軒家の前に立っていた。

「うーん：なんと行ってリボーンと会うべきだろう：？」

言い訳が思いつかない零は、そのままそこに突っ立っていた。すると不意に声をかけられた。

「どうした？ 上がれ」

「：いきなり後ろから話しかけるな」

「気配消したつもりは無い。これくらい気付け」

「無茶です、リボーン：」

とりあえず、本人に招待されたという事なら怪しまれないだろう。だが一つ問題が。

「ええ！？ 何で有川君！？」

沢田綱吉である。イタリアから来た謎の転校生が、リボーンと顔見知りでした☆なんて怪しすぎる。『ボンゴレ関係の人』と思われるでも仕方が無い。全くもって違うのだが。

「実は沢田君に用がありました」

笑顔で取り繕う。っていうか「沢田君」は変だったかな？と今更ながらに思った。案の定彼は、

「ツナで良いよ。それで？用って何？」

鈍感で優しい彼に感謝である。言い訳に騙されてたらマフィアのボスにはなれないぞ、沢田綱吉もといツナ。零はそう心の中で呟いた。

「それは…」

「それよりツナ。なんか飲み物持って来い」

零の言葉はリボーンの言葉に遮られた。

「ああ、分かった。有川君、ちょっと待ってて」

ツナは何の疑いもなく部屋を出ようとする。零はそれに答えて、一つ付け加えた。

「はい。それと、零で良いですよ」

ツナはリボーンに言われた通りに下に飲み物を取りに行った。

部屋に残された零とリボーン。すぐにリボーンが口を開いた。

「実は、ツナのファミリーに入って欲しい」

いきなりの言葉に、零は驚く様子もなく言う。

「…なんで？ボクはそんなに強くないだろう？」

「いや、お前にはヒットマンの才能がありそうだ。それに——」

リボーンが少し言葉を濁した。零は躊躇いもなくそれに突っ込む。

「それに？」

「それにお前には、何かとんでもねえ能力ちからがありそうだ」

まだ予想論という事らしい。だから言葉を濁したのだろう。

「期待には沿えないかもよ？」

帝は皮肉げに言った。

「それでも良い。やってくれるか？」

それでもリボーンは食い下がる。そこまで魅力的なことをした覚えは、無いはずなのだが…と零は思ったが、リボーンの原作に関わりやすいという事と秤にかけて決めた。

「…良いよ。女である事を隠してて良いんだったら」

交換条件を出したが、リボーンはそんなこと実際どうでも良いらしい。

標的5 スカウトされました、ボク（後書き）

神「お主、何故ファミリーに入ったのじゃ？」

零「何でだろうね。原作変えてみたくなった」

神「…お主、趣味悪いの」

零「お前に言われたくねえ、クソ爺」

神「性格も悪いの」

零「お互い様だろ」

神「そんなだから男に間違われるのじゃ」

零「間違ったのお前だろ」

神「……………スミマセンデシタ…」

標的6 話は勝手に進めますよ、ツナ君

ツナの叫び声は、夕日と共に夜の闇に消えていった。つまり今はお星様が昇る位の時間であり、ある程度は良いが「叫び声」とは相だな近所迷惑である。だが、そんなこと気にせず話は進んだ。

「つまり、リボーンが零君のことスカウトしたのか？」

落ち着いた訳ではなさそうだが、事態を把握しようとして話を聞いたツナが言った。

「ああ」

「はい」

零とリボーンは同時に返事をする。

「俺はマフィアのボスになんてならないからな！！零君もそんな赤ん坊の言う事なんて…」

ツナは二人に言い聞かせるように怒鳴った。だが言葉の最後の方は零の言葉に遮られた。

「信じますよ。ツナ君は絶対良いボスになりますって」

そう言いながらニコツと満面の笑みを浮かべる。大抵の人間が騙される「外面」というやつだ。

「なかなか人を見る目があるな、お前」

「ありがとうございます」

今度は本心からリボーンに向かって笑った。

「ストーーーーーップ！！とにかく、ボスになんて絶対にぜったいにならないぞ！！」

その二人の会話を、ツナが大声で止めた。

「あ、そろそろ時間も遅いんで帰ります。では十代目また明日」

零はそんなツナの言葉を無視して、嫌味のように「十代目」の所を主張して、ニヤリと笑って扉を開けた。

「おう、じゃな」

リボーンは普通に挨拶をしてくる。

「勝手に話を終わらせるなああああああああああ！！！！！！！！」

ツナがその日、零君ってあんな人だったっけ？と思いつつも、転

校生だから俺が知らない部分も…というか知らない部分のほうが多いのか…そっか…と自分で決着をつけたことは、リボーンだけが知っている。

翌朝、近所から苦情が来たことは言うまでもない。

標的7 記憶操作はタダじゃない、じゃぞ

ある晴れた休日の朝。鳥は爽やかに歌い、雲はゆっくりと流れてゆく。そんな平和な日、彼女（とアホ牛）は空港に降り立った。

「今度こそ、逃がさないわよ」

零はこの前と同じく、いや今度はきちんと玄関のチャイムを鳴らして、ツナの家の前に立っていた。

「おはようございます。ツナ君いますか？」

零がそういうと、ツナの母が嬉しそうに言った。

「あら、ツナ君のお友達？ 上で勉強中よ」

「そうですか。上がっても大丈夫ですか？」

零が可愛げも無くそんなことを言っても、ツナの母は笑いながら通してくれた。

「ええ、どうぞ」

「では、お邪魔します」

多少の礼儀は知っているさ、と零は自分の心の中で思ったが「お

邪魔します」と言う事が出来れば完璧なマナーであるかは甚だ疑問である。

零が階段を上っていると、

ブワンッ

ドッガーーーーン

「ぎゃあああ!!」

明らかにおかしい爆発音と共に、ツナの叫び声がする。

「おいリボーン!どこの世界に答えを間違えるたびに爆発を起こす家庭教師がいるんだよ!!」

リボーンに異議申し立てるツナの声と、それがどうしたという様子のリボーンの声が聞こえてきた。

「これが俺のやり方だ」

「間違ってるよ、それ…」

ツナがリボーンに突っ込みを入れてる途中に零が部屋に入る。

「おはようございます、ツナ君とリボーン」

いきなり現れた零に、ツナは心底驚いている。

「ええ!? 何で零君!？」

前回のデジャビュである。

「いや実はお願ひがありました」

「何だ？」

ツナではなくリボンが質問してきた。だがしかし、もうそんな説明も要らないだろう。

「いえ、もう良いんです。そろそろですから」

そう言いながらヘラヘラ笑っている零。そう、今日はランボが来るはず。そして予想通りに来たのである。

ドガーーン

バリーーーン

ガッシャーーン

「んぎゃあーーーーー!!!!!!」

ボカーン

ある程度暴れた後に、手榴弾を跳ね返されたランボが、窓の外で綺麗な花火となる。

「綺麗ですねー」

零は目の前で子供が爆発したのに、そんな形容詞を口にする。

「あそこまでしなくても…知り合いなんだろう？」

ツナも心配するというより、同情している様子だ。

「あんな奴、知らねえぞ」

突然のリボーンのカミングアウト。ツナは少し驚いていた。

「え?」

だが原作をある程度知っている以上、零は驚くことも無い。

「そうですね。ボヴィーノファミリーなんて中小マフィアですからね」

二人の会話に、いきなり零が入り込む。

「ああ、俺は格下は相手にしねえんだ」

零の言葉に続けるようにリボーンが言った。

「……………（なんか、かっちょええ…）」

ツナはランボに同情しながらも、少しリボーンが格好良く見えたらしい。

「それにしても、何でマフィアのことなんて知ってんだ？」

リボーンが零に問う。まあ、流石に知っているのはおかしいか。つい言葉に出てしまったからなあ…

「…勉強したんですよ。色々と、ね」

「……そうか。えらいな、立派にファミリーとしてやっていけるぞ」

明らかに少し溜めがあった。明らかに怪しんでいる。

「そう言ってくれると嬉しいですよ、リボーン」

怪しまれてしまった…さて、言い訳はどうしようか…

そんなこんなで一日が過ぎ、零は自宅へと帰った。

「おい、クソ爺!!」

『何じゃ、騒々しい』

「…本当に出やがった…」

『おっと、まずい。出なければ良かったのう…』

「なあ、クソ爺」

『神様と呼んでくれ』

「…なあ、クソ爺」

『……………なんじゃ』

「記憶操作、とかって出来ないのか？」

『出来るぞ』

「出来るのか？」

『出来る』

「じゃあ、ボクを元々ボンゴレファミリーに^{れい}関係があるようにしてくれない？」

『何故じゃ？』

「リボーンに怪しまれてるけど、言い逃れできるように」

『……………』

「何だ？」

『^{ただ}無料でやる訳にもなあ…あれは相当な負担がかかるからう』

「何が言いたい？」

『ズバリ、お主には仕事を頼みたいのじゃ』

「どんな？」

『いやあ、一度元の世界に戻って…』

「戻って良いのか!？」

『一度な』

「…もう一回戻ってくるのか…」

『ザツツライト☆じゃぞ』

「ウザイからそれ止めろ。それで、仕事って？」

『元の世界で、アイツがやった後始末をして欲しいんじや』

「アイツ？」

『本物の有川零のことじゃ』

「…はあああああ!?!?!?」

標的7 記憶操作はタダじゃない、じゃぞ（後書き）

零「本物の有川零…」

神「会ってみたいか？」

零「ちょっとだけ」

神「そうか。だがアイツはアイツの『ピー』じゃし『ピー』じゃし『ピー』なのじゃが…」

零「伏字が多い」

神「だって、次回書くんじゃないもん。作者が馬鹿じゃからと言って、こんなところでネタバレさせんぞ」

零「作者が馬鹿？あれは馬鹿じゃない。『ピー』で『ピー』な『ピー』じゃないか」

神「お主は、放送禁止用語を使うな」

零「伏字なんだから良いじゃないか」

雷歌「あたしの人権は…？」（注…作者）

零「ない」

神「ないじゃろ」

標的8 流石に怒りが、のう

何だろ、なんか変だぞ。ワタシの住んでたトコってこんなトコだったかな。住んでた家、ないし。ってか人がいないし。というより…

「何ここ？戦場デスカ？空襲跡デスカ？」

ワタシ…零ではなく本当のワタシ、あさかゆう浅架由宇は怒りを抑えて言った。

『そんな風に見えるかのう…』

「…ここが焼け野原以外の何だと言うんだクソ爺！！！」

怒りは抑え切れなかった。バカな神は姿を現さずに声だけを届ける。

『戦場でも空襲跡でもないぞ。アイツが暴れまくった跡じゃ』

「ソイツは原爆以上の威力があるのか！！！」

『説明したじゃろ。アイツはアイツの…』

「アイツじゃ分からん！！！」

『面倒な奴じゃ…本物の有川零は、ワシの友人の息子じゃ。つまり神の子』

「それで？」

『少し性格が悪くての…』

「少し？」

『かなり性格が悪くての。ワシの友人曰く、社会勉強が必要だとかで…』

「だから？」

『そっちの世界に送っとくから、じゃね☆ってメールが…』

「メール…」

『それでじゃ。転生者が来るとな、決まって何か少しだけイレギュラーが起こる』

「それがどう関係してこんなことになるんだ？」

『アイツがキレてのう…更にイレギュラーが重なって…』

「で、日本は焼け野原になった訳か？」

『惜しい！！ここはイタリアじゃ。零はイタリアの暮らしに慣れていたからの☆』

「開き直るなボケ。で？ワタシが転生した理由は？今の話じゃ分か

んないんだけど？」

『神が故意に人口を変えると、変な事が起こることがあるからの。交換じゃ』

「ワタシに白羽の矢が立った理由は？」

『ダーツ』

「……………」

『もうだんまりは通用せんぞ』

「……………」

『……………』

「……………」

『…ゴメンナサイ』

「で、元に戻すにはどうしたら良い？」

『それはじゃの、ホレ』

神のその声と同時に、空から何か降ってきた。何か袋のような物で、中には植物の種みたいなものが入っている。

「…何、コレ？」

『?大地の種?じゃ。それをまくとそのすぐに花が咲き、散る時に大地の時間が戻る』

「何その都合の良い種…」

『神がコレくらい出来んでどうする』

「その前にこんな事を起こすなああああ!!!!!!!」

とりあえず種をまいてみる。するとすぐに芽が出てきて、それがスルスルと伸び由宇の身長くらいまで到達した時、大きなピンク色の花が咲いた。

「以外に綺麗」

そう言って、種をどんどんまいていく。その全てがピンク色の花を咲かせる。そして一斉に散り始めた。街の形が戻ってくる。花びら一枚一枚が人間になる。クソ爺にしては神らしい、幻想的な光景だった。

「さて、で、どうするの?」

『零のところに行くぞ。流石に怒りがこみ上げてくるからもう』

「ワタシもあんに怒りがこみ上げてくるよ」

標的8 流石に怒りが、のう（後書き）

由「零ってどこにいんの？」

神「んゝ多分リボーンの世界じゃ」

由「ワタシはどうやって行くの？」

神「どうやってって、普通に…あ」

由「誰と交換して行くの？」

神「どうしよっかのう…」

由「とりあえず女にしてよ。面倒だから」

神「誰が良いかの…」

標的9 従兄妹って、どういう事？

真っ白な、何もない空間に神は立っていた。

「ハハハ、クソ爺か…」

神の乾いた笑い声は、虚無な空間に響いて消える。

「由宇—————お前がそう呼び始めたのは、いつからか。あの時から、コレこそがイレギュラー…」

まったく意味の分からない言葉を口にして、また笑う。あれから、何度繰り返した笑いだろうか。あの日、イレギュラーがお前の身体を侵食し始めた時から、何度…。

「おっと、転生させねば」

そうして杖を取り出す。人口云々の話はでたらめで、別に交換する必要などない。浅架由宇を浅架由宇として転生させるなど彼にとっては朝めし前である。

由宇が気付くと、そこは最近ずっと使っていたベッドの上だった。

「あれ？ここって…」

有川零の家である。そしてそのベッドである。

「何で？ワタシどうなってんの？」

「うるさいな。まだ朝じゃないか」

由宇が一人で喋っていると、隣から男の声がした。ベッドの中から。

「な、え、ちょ…誰!？」

由宇がパニックって言った言葉に、彼は更に文句を言う。

「んゝ、うるさいなあ。ここ、ボクのベッドだよ」

少し身体を傾けた所為で、彼の亜麻色の髪が揺れる。顔立ちも整っていて、幼さが残っているところがまた、天使のようで可愛らしかった。

「え？もしかして…」

由宇の言葉を遮って、彼は大きな欠伸をする。

「ふぁゝあ…。さっきからうるさいなあ。コレだから人間は嫌いな

んだ」

「有川…零？」

由宇は驚きを隠せないように彼の名前を言った。

「何？フルネームで呼ぶの？従兄妹（従妹）の設定なの？」

クスクスと彼が、零が笑う。天使っぽい顔は悪魔のように黒く見えた。しかし由宇の意識はそこには無かった。

「え？従兄妹！？誰と、誰が！？」

「ボクと君だよ。聞いてないのか？」

ええ、まったく。何もかもさっぱりです。あの神、絶対殺す。マジ殺す。

「どういう事？全然意味が…」

『いやあ、すまんのう…伝え忘れとった。お主、今日から有川由宇じゃから』

いきなり聞こえる声。突然出てくるのは、いつもの如くだ。

「いきなり出てきて（声だけ）いきなりそんな事言って、終わり？何か他に言う事は？」

『…うう、ゴメンナサイ』

「神も様あ、無いね」

零がいきなり会話に入ってきた。

『おう：久しぶりじゃの、零』

「久しぶり、ラビ」

「ラビ！？そんな名前なの！？」

由宇は思わず零の言った名前に吹き出してしまった。ラビってそんな：可愛い名前じゃ似合わない：と笑い続ける。

『うるさい！！零、その名で呼ぶなと言ったじゃろ』

「だって母さんがそう呼べて：」

零がふて腐れたように言った。お前、マザコンか？由宇はそう思ったが、その言葉は胸にしまっておいた。

「それよりクソ爺！従兄妹ってどういう事？」

由宇は名前を言わず、そのまま質問した。流石にラビとは呼べない。

『おう、そうじゃったな。まあ、何かと面倒くさそうだから二人で頑張れ』

「は？」

———説明になってなくね？

驚いたのは由宇だけで、零は既に話を聞いているようだ。

『記憶操作はしておいたから、じゃな』

そう言って、神（神の声）は消えた。

「さて、じゃあ、着替えて」

いきなり零が制服を渡してきた。女子の、ちゃんとした制服だった。そういえば、髪とか伸びてるような…まいつか。と自分で決着をつけた。

「また転入生からか…」

「せいぜい頑張ってね」

性格良さそうだとか、見た目で判断しちゃいけないね…

（→標的1 参照）

標的9 従兄妹って、どういう事？（後書き）

由「お願いだから説明なしで転生させるのやめて」

神「ホントにすまんかったのう」

由「ホントに分かってる？」

神「おう。ダイジョブじゃぞ」

零「ねえ、君たち何話してるの？」

神「ぬう、零。お主どこから…」

零「ここが後書き雑談会？初めて来たあ」

神「無視するな！」

由「悪いけどあんたの名前は、今まで出てるから」

神「由宇も無視か！？」

零「ホント悪いと思ってる？君の所為で生活大変なんだから」

神「もしもし」

由「嘘つけ。記憶操作されてるだろ」

神「……………」

零「フン、気の持ちようだよ」

神「……………」

由「ガンバレ」

零「愛がこもってない」

由「愛なんて無い」

神「ええええええいいいい………！……！無視するなあああ………！！！」

由・零「うるさい」

神「……………」

標的10 お前だろ、くそ神

「えー、という事で、今日からウチのクラスの仲間になる有川由宇さんだ」

担任がよくある説明をして、由宇に挨拶を促す。

「えっと、イタリアから来ました、有川由宇です。よろしく」

由宇がニコツと笑うと、クラスの男子から歓声が沸きあがる。

「超カワイイ！」

「俺のタイプ!!!」

「最近男の転入生多かったからな!!!」

「萌え〜」

「うるさい。えー、名前を聞いても分かるとおり、A組の有川君の従兄妹にあたる」

そう、ここはツナや零たちとは違うクラス、B組なのである。

「ねえ、どんな男がタイプ？」

「何が好き？」

「有川とはただの従兄妹？」

零として転入してきた時と何も変わらない。性別以外は。だが、

質問攻めは男子だけにとどまらず、

「ねえ、有川君と仲良い？」

「彼って何が好き？」

「有川君って甘いものの食べられる？」

あわよくば有川君とお近づきに、という女子からも質問攻めなので以前よりも更に疲れた。

————転入なんてそうそうするものじゃないね…

昼休み、屋上に向かった。

「お、由宇。クラスどうだ？」

零が馴れ馴れしく話しかけてきた。ちょうどツナたちも屋上で暇を潰すようだ。まあ、それを見越して屋上に来たのだが。

「普通」

由宇は素っ気なく返事をし、ツナたちの方へ向く。

「初めまして。零の従兄妹の有川由宇です。よろしく」

由宇は満面の笑みで笑いかけた。

「は、初めまして。俺は沢田綱吉。よろしく。で、こっちが山本。それと獄寺君」

「へえ、有川の従兄妹か。よろしくな」

「有川の従兄妹？怪しい…」

ツナ、山本、獄寺がそれぞれ返事をする。こういうところに性格が出る。

「ちなみに、零と同じで生まれも育ちもイタリアです」

詳細は分からないが大まかな設定は教えてもらっている。イタリ
ア育ちのお嬢様とかいうふざけた設定らしい。

「おい、今日が何の日だか知ってるか？」

どこからともなくリボーンの声がした。そしていつの間にかツナ
の頭に乗っていた。

「うわぁ、リボーン！」

ツナがビククリして間抜けな声を出した。

「ちやおっス」

リボーンが挨拶をする。ツナはそんなこと関係なく突っ込む。

「いつも学校に来るなって言ってるだろ！ってか今日って…」

「そうだ。バレンタインデーだぞ」

いつの間にかチョコの着ぐるみを着ていたリボーンが言った。そ

の言葉に由宇は驚く。

「ええ！！バレンタインデー？もうそんな時期？」

いつの間にか日常編の大半が終わってるって事？何で？何で？結構楽しみにしてたのに…

『…なんでアニメのこと知ってるのじゃ？』

「（黙れくそ神。勝手に記憶を流し込んだのはお前だろ。お・ま・え！）」

がつくりしている由宇に、零がボソツと耳打ちした。

「向こうの世界とここでは、時間の進み方が違うんですよ」

今更知っても意味ないけどね…

由宇は少し落ち込んでいた。学校が終わるまでは。

標的10 お前だろ、くそ神（後書き）

由「ああ…もうちょっと日常編エンジョイしたかったなあ」

神「お主、最初は転生に乗り気じゃなかったくせに」

由「うう…だって、だって…」

神「何じゃ？」

由「原作知ってたら一度は転生してみたいと思わない!?!」

雷歌「思う!!超思う!!!!」

由・神「黙れ」

雷歌「…はい……………」

零「次回の予告、しないの？」

由「あ…忘れてた…」

零「はあ、コレだから人間は…」

由「うるさい。性格悪いくせに」

零「君に言われたくないね。ほら、次回予告」

由「あ、えと、次回は…」

零「時間切れ」

由「あ、そんなあ」

標的11 お前とは何だ、お前とは

所変わりツナの家。ちょうど笹川京子と三浦ハルとビアンキが、
チョコレートを作っているようだ。

「ハヒッ、これどうやってやるんですか!？」

「ああ、これはここをこうやって…」

「うわあ、すごい。ビアンキさんって本当に料理上手ですね」

「ありがとう」

キラッキラと輝く乙女オーラでキッチンが満たされている。以前
(零でいるとき)は仲に入りたくても入れなかったが(男だから)
今の由宇は違う。歴とした女なのだから。

「こんにちはあ」

「ん? あ、こんにちは。確かB組に転入してきた…」

笹川京子が由宇に気付いて話しかけてくる。どうやら由宇のことを
知っているらしい。

「はい。有川零の従兄妹の由宇です。仲間に入れてもらえませんか
?」

女子として受け入れられるように、と満面の笑みで返す。笹川京
子も三浦ハルもビアンキも、快くOKしてくれた。

—————やっぱ女子なんだからこういう事したいよね

久しぶりの料理だが、まずまずといった感じである。仲良く四人で料理していると、ビアンキの持っているボールから怪しげな煙がたっている。

————ポイズンクッキング：こわっ

チョコ作りもひと段落ついて、ビアンキと一緒に二階へ上がる。するとそこには、牛柄のシャツを着た格好良い男が倒れている。そう、大人ランボである。あの、ビアンキの元彼に似ている大人ランボである。

「つ　ロメオ！！死ねえ！！」

そう言ってビアンキは、持っていた泡立て器を大人ランボに向けた。

「うわああああ！！」

大人ランボが間抜けな叫び声を上げた。リボーンはツナに向けて銃を構えたが、それよりも早く由宇と零が動いた。

「ま、まあまあ、落ち着いて。ビアンキさん？」

「大丈夫ですか？ランボさん」

ちなみに、ビアンキを止めたのが由宇で、大人ランボを抱えてベツドに運んだのが零である。

「止めないで、由宇。容赦しないわよ」

「嫌ですよ。あれは、ロメオさんじゃないです」

興奮しているビアンキをどうにか止めようと、由宇は腕に力をこめる。

「離さない！！」

それでもなお、ビアンキはロメオ（大人ランボ）を殺そうと動く。そこで由宇は気付いた。

—————手っ取り早いのは、外かな？やっぱり。ツナたちもポイズンクッキング食べなくて済むし

そう思った由宇は、大人ランボを連れて外に逃げ出す。

—————ああ、女なのに男を抱えて走り回るなんて…何が悲しくて、バレンタインを存分に楽しめないんだろう…

走り回ってる間に、5分が過ぎたらしい。大人ランボは、元に戻った。

「あり〜？お前誰だあ？」

知らない奴に抱えられえて走ってるんだから、当たり前前の反応か…だがしかし、

「お前とは何だお前とは！こっちはバレンタインデー我慢してんだ

よ!!」

「ランボさんはそんなこと知らないもんねえ」

怒っている由宇にもビクともしない。能気な牛である。

「あら、ロメオは？」

いつの間にか追いついてきたビアンキが言った。それに由宇はこう答える。

「ああ、あの人なら、『バイバイ、ビアンキちゃん。また会おうねえ』なんて言ってどこかに行っちゃいましたよ」

どこかの馬鹿医者がいそうなセリフを返したが、ビアンキは：

「まあ、ロメオ!!」

なんて浮かれていた。

標的11 お前とは何だ、お前とは（後書き）

由「あゝあ、バレンタインもうすぐ終わっちゃう…」

神「お主そんなに楽しみだったのか？」

由「元の世界では、訳あって友達がいなかったから…」

神「悲しい奴じゃな」

由「うるさい。ところで、次回予告だけ…」

神「何か問題あるか？」

由「『由宇には秘密だから、次回予告しないよ』って…？何で秘密？」

神「とっぷしいくれっとじゃ」

零「ちなみにボクは知ってるよ」

由「なんかムカつく」

標的12 みんな、いい人だあ

さて、無事ビアンキ追い出しに成功!! するもどことなく空気が重いツナたち。

「ねえ、ビアンキ追い出しは出来たけど…」

ツナが重い口を開いた。

「ああ、代わりに有川の従兄妹が、な」

ツナに続いて山本が言った。あの後ハルや京子が来て…

『え? ビアンキさんと由宇ちゃん外に行っちゃったの?』

『そんなあ…あんなに楽しみにしてたのに……残念です』

「バレンタインって、やっぱり女子が楽しむべきイベントだよな…」

山本は更に続けた。その言葉に獄寺が反応する。

「あーあ、メンドクセー…大体イタリアには、バレンタインに女子がチョコ上げる風習なんてなかったですよ? 十代目も気にすること無いっス」

「その通りだぞ」

リボーンがテーブルの上に座って、レオンで遊びながら言った。
ツナはそれに反論する。

「でもやっぱ由宇ちゃんに悪いって」

「ガタガタうるせー。おい、外国ではバレンタインデーをどうやって過ごすか知ってるか？」

リボーンはレオンを花の形にして言った。

「恋人同士でゆっくり過ごすんだ。女だけに苦労させるなんてナンセンスだな。男なら花束の一つでも贈ってやれ」

「……………」

その場にいる全員が黙った。全員で全員の目を見て、そして頷く。

「決まりだな」

フツとリボーンが笑った声で全員が動き出した。

「はあ…今頃みんなチョコレートフォンデュ、食べてるんだろうな…」

「いいえ、まだよ。まだクラッカーができてないもの」

由宇の独り言に、ビアンキが当たり前のように返してきた。今思
い出すのもアレなのだが、みんなと会ってからまだ一日と経ってい
ない。それなのにみんな優しく接してくれている。元の世界ではあ
りえないことだ。特に由宇はそんな経験一度も無い。

「へっへーん。ランボさんもチョコ食べちゃうもんねえ」

そう言って、ランボは由宇の腕の中から飛び出して二階に走って
行ってしまった。

「さて、クラッカー作っちゃいましょ」

ビアンキがそう言ってキッチンに向かって行った。由宇もそれに
続く。

「はい、手伝わせてください。いいですか？」

「いいわよ」

そうしてポイズン・クッキングと普通のクラッカーが出来上がったのである。

二人で二階に行ってみると、なんだか妙に静かだった。京子やハ
ルもいるはずなのだから、もうちょっと騒がしくても良いと思うん
だけど…そんな不安を抱きつつ、ドアノブに手をかけた。すると、

「「ハッピーバレンタイン」」

みんなが出迎えてくれた。

「え…？」

「あのねえ、これ、みんなが計画してくれたんだって」

驚いている由宇に、先に来ていた京子が説明した。

「あ、あの、部屋の飾り付けとかケーキを買ってきただけなんだけど…」

ツナが恥ずかしそうに言った。そんなこと関係なしに由宇は思った。

「……………みんな、いい人だあ」

由宇の頬に、一筋の涙が流れた。

「ど、どうかした!？」

ツナが今度は心配そうに由宇に言った。そんな様子が可笑しくて、由宇は笑ってしまった。

「プツ、いいえ。ただ、こんなバレンタイン初めてです。とっても楽しい!」

その後は、女子が作ったクラッカーとチョコフォンデュ、男子が買ってきたケーキを食べて解散した。本当に楽しい時間を過ごすことが出来た。

標的12 みんな、いい人だぁ（後書き）

由「うわぁ〜楽しいバレンタインだったなぁ」

神「そうか。それで？」

由「何？その手」

神「チョコはないのか？」

由「今回はチョコフォンデュと逆チョコみたいな感じだったから」

神「…ちよつとへこむのう……………」

零「ボクもだよ…」

由「ウザイ。えー、次回は…」

神「次回予告なんぞするのか？」

零「今までしなかったくせに」

由「誰のせいだ。次回予告はする」

零「ホントに？」

由「ホントに」

零「ほら、そんなこと言ってる間に時間切れー」

由「えっ、そんな！」

標的13　　ってか、どこから入ったの!?

さて、フウ太がやって来た。

ツナの部屋にツナ、リボーン、ハル、山本、獄寺、ビアンキが集まってランキングを付けてもらっている。

side　ツナ

「ツナ兄の愛している人ランキング…」

「ちょ、ちよつつつとまってええ!!」

フウ太の言葉を遮ろうとするツナだったが、その努力もむなしく足が浮き上がっている。

「第一位は…レオン」

「うそおおお!!?」

フウ太の言葉に、その場に居た全員がそれぞれの反応をする。

「ハハハ、ホントか? ツナ」

笑い飛ばすのは山本。

「意外ね」

静かに受け止めるのはビアンキ。

「うう……………」

悔しがるのはハル。そして、一番驚いているのはツナ本人であった。

————自分で自分の気持ちが分からないいいいい！！

ハルは窓の外を見て言った。

「ハルは、失恋してしまいました。ハルのハートは、この空と同じ大雨です」

「ん？雨？」

突然フウ太の周りで浮いていたものが地面に落ちて、フウ太も倒れこむ。

「どうしたんだ、フウ太？」

ツナが立ち上がって、心配そうに言った。ツナに言葉を返したのは、フウ太ではなく由宇だった。

「フウ太は雨に弱いんですよ。雨が降ってるとランキングも狂っちゃうらしくて…」

「そ、そうなんだあ…ってか由宇ちゃんどうして知ってんの！？ってか由宇ちゃんどこから入ったの！？」

頭に浮かんでくる質問を、次々と口にするツナ。その質問に答えたのはフウ太だった。

「ユウ姉とは前にイタリアで会ったことがあってね…」

「ええ、それで知ってる訳です」

ダルそうな口調で言ったフウ太の言葉に、由宇は続けた。その言葉にいち早く反応したのはツナだった。

「ってことは、雨が降ってからのランキングは間違いなの？」

「ええ、そういう事になります」

どこから入ったのという質問を無視されていることには、まったく気付かないツナであった。

「いつでしたっけ？雨が降り出したの」

そう言っただけでハルが窓際に行くと、次にハルの口から出たのは絶叫だった。

「な、何ですか！？この傘の大群！？」

「え？」

皆（由宇以外）が驚く中、ビアンキは一人部屋の外に出た。

「奴等、トッドファミリーですね。今の男、見覚えがあります」

窓の外をちらりと見て獄寺が言った。

「じゃあ、あいつ等がフウ太を狙って…」

「そうみてえだな」

心配そうにしているツナに対して、リボーンは子分たち（幼虫）を顔中にくっつけてふざけているように見える。

「フウ太をかくまってやるって言ったのはお前だ」

「それはそうだけど…」

口ごもるツナ。流石にこうなる事までは予想など出来なかったのだからどうしようもない。

「ツナ、心配すんな。俺も手伝うぜ」

「ここは籠城して…」

「それ良いな！」

二人で勝手に話を進める山本と獄寺。

「いや、それはちよつと…」

それに突っ込みを入れるツナ。

「じゃあ、この作戦でどうかな？ 獄寺君たちでこうして…」

由宇が出した案はすんなり通った。原作通りの作戦なので反論もないだろうけど。ちなみに、この作戦会議の所為で、ビアンキが一人で逃げたことは誰も知らなかった。

標的13　　ってか、どこから入ったの!?(後書き)

零「今回も次回も出番無いってさ…」

神「誰から聞いたのじゃ？」

零「『ピー』で『ピー』で『ピー』な作者」

神「その伏字は放送禁止用語じゃ」

雷歌「あ、あたしの人権は…ナイですよ。そうですね…(泣)」

零「分かってるなら良いよ」

神「そういえば今回は珍しくツナsideだったのう」

雷歌「あたしも会話に混ぜてくれるんですか!?!」

神「おう。お主の気持ちはお主にしか分からぬからの」

雷歌「うわぁ〜嬉しい〜」

零「はい、時間切れー」

雷歌「ちょ、ちょっと待ってえ!!!!」

零「無理。じゃあね」

標的14 何でそんなこと知ってんの？（前書き）

えー、この度は更新が遅くなりまして

誠に申し訳ございません。

謝罪は後書きでさせて頂きたいと思います。

標的14 何でそんなこと知ってんの？

作戦も上手いきき、公園でトッドファミリーの三人と、ツナ、フウ太、由宇が対峙していた。まあ既に結果など見えているのだが。

「死ぬ気でフウ太を守る！！」

さあ、ツナが死ぬ気モードに入った。これですぐ決着がつく。原作を知っていると、ちよつとつまらない気も…

由宇がそう思った矢先、右の方から無数の針が飛んできた。

「何！？」

由宇はフウ太を抱えてよけた。ここからはちょうど木などが邪魔をして、ツナたちの姿は見えない。ツナは、多分大丈夫だという勘を頼りに針が飛んできた方向を見る。

「…ランキングフウ太」

茂みの陰から出てきたのは、黒曜中学校の制服を着た男だった。柿本千種である。

—————何で？まだ出てこないはずなのに…

何も答えない由宇。ツナはトッドファミリー三人の相手をしてい

て気付かなかっただけ。まだ戦い続けている音がする。

「ユウ姉？この人…」

フウ太は千種を見て尋ねてきたが、由宇はそれには答えずに、フウ太に言った。

「フウ太。ツナ君の所に行つて？もう大丈夫だと思うから」
「で、でもユウ姉？大丈夫？」

心配するフウ太を、由宇は何も言わずにツナの方へ軽く突き飛ばした。それと同時に千種はヨーヨーから毒針を飛ばしてきた。由宇はそれをかわしながら彼に問う。

「何でここに居るの！？」

「…君が、知る必要はないよ。ランキングフウ太、渡してくれない？」

千種がまたヨーヨーを構える。由宇は零（本当は神）から護身用にと渡されていた15cm程度の棒状のものを、同じく渡された左腿の専用ホルスターから取り出す。両手で持つとそれは、瞬時に2m程に伸びた。由宇はそれを使い毒針をはじき返す。

何度かそれを繰り返した後、千種は不意に攻撃をやめた。

「…どうしたの？」

由宇は警戒して千種に尋ねた。

「帰る。君じゃボンゴレの事話してくれなさそうだし」

そう言って背を向けて、公園の外へ出て行く。由宇はそれを黙って見ていた。

「由宇ちゃん！大丈夫！？」

ツナが由宇の近くに寄ってくる。フウ太も心配そうにしている。

「大丈夫だ。由宇はなかなかのもんだぞ」

いきなり出てきたのはリボーンだった。一部始終を見ていたのだろう。

「見てたんですか？」

不快感を見せ付けるように、由宇の表情は険しくなった。その変化を、ツナは不思議に思った。何を見られなくなかったのだろう、と。

「お前：」

「襲ってきた人は、黒曜中の制服を着ていました。ボンゴレを探しているようです。ツナ君、あなたを」

リボーンが由宇に言いかけた言葉を遮って、由宇はツナの方を向いた。ツナはそれに驚いていた。

「ええ！？何で俺！？」

「それはあなたがボンゴレ十代目だからです」

ツナはただ驚いた。だが気付く。

「…なんで由宇ちゃんそんなこと知ってるの？」

由宇は少し返答に困ったが、苦しい言い訳を思いつく。

「それは、零から聞いて…」

そう言ってニヘラツと笑った。

———ツナ君は騙せても、リボーンは騙せないか…な？

リボーンは黙ったまま、由宇を見ている。零ともども怪しまれている様子だから仕方がないとしても、もうちょっとは隠し通せるつもりだった。零と由宇（由宇のは嘘だけど）の過去を。

———黒曜編が終われば分かっちゃうことなんだけどね…

標的14 何でそんなこと知ってんの？（後書き）

由「…で？謝罪は？」

雷歌「させて頂きます」

『更新が遅れたこと、心よりお詫び申し上げます。

言い訳のようになりますが、高校受験を控えているのにも関わらずこの連載を始めてしまったのです。しかしこれからは、とりあえず大切な行事…といいますが、大事なことはありませんので、普通に更新していきたいと思います』

由「ワタシは、出番はまだかと待ちくたびれた」

雷歌「申し訳ございません」

零「まあまあ、そんなにいじめないでおう」

雷歌「ありがとうございます。極力これからはいろんな人の出番を増やそうと思ってます」

零「そうだね。次回も少ない知識と、クソみたいな文章能力で頑張っ
て」

雷歌「…そうですよね。あたしには人権ないですよ」

標的15 お父さんと、呼ばれたら…

神は真っ白な、空虚な空間に居た。

「…今回も、無理かのう…」

悲しそうな声が響く。何もない空間は、更にその悲しみを倍増させている。

「あれから、何年————何世紀経ったかのう…ユウ…あれからワシは年を取らなくなった。お前も記憶をなくした。時計の針はあの日から動かなくなってしまったのう…」

『全て、全て全てすべてすべてすべてすべて————消してやる!! 奪ってやる!! お前も俺と同じように、すべてを失えばいいさ!!』

『お前の所為だ! お前の所為で………は! お前も俺と同じ苦しみを味わえばいい!!』

『神も堕ちればただの人間、それ以下だ!!』

あの日の出来事は塵の一つ一つさえ頭に浮かんでくる。その前後の出来事は何一つ覚えていないというのに。怒りと憎しみに満ちた力を受け、ユウがその手に落ち、すべての歯車が狂っていった。

それから幾度となくユウに接し続けた。様々な形で。そのまま神として、あるいは言葉を話す動物として。今回のような転生はその中でも一段と多かった。しかしユウの記憶が戻ることはなかったし、自分は年をとることもなかった。

『おじさんは、何で頑張ってるの？無理矢理にでも思い出させること、出来るんじゃない？』

『ボクがユウに会って来てあげるよ』

『ボクにだって一応は責任があるわけだし』

零のこの発言が、由宇を転生させるきっかけにもなった。無理矢理に思い出させることには賛成出来なかったから、零と離すために由宇を転生させた。

転生させたら記憶が戻るなどとは本当に信じているわけではない。気休めにやっているだけで、それでも記憶が戻ったらそれはそれで

嬉しいことこの上ない。

壊れた時計は修理するまで動かないし、狂った歯車は元に戻さない
と動くことはない。

動き出さなければ変わらないし、変化しなければ直らない。

だからたとえ無力だと知っていても、意味を見出せなくても、それが大きな変化をもたらせば良いと思う。蓄積された小さな変化は、もしかしたら大きな結晶になるかもしれない。その、小さな小さな可能性に賭けて、いつまでも足掻いてみる。

「…ユウ…もしもまた、その口で『お父さん』と呼んでくれたら、どんなに嬉しいだろうかのう」

その声もまた、空虚な空間に響いた。

標的15 お父さんと、呼ばれたら…（後書き）

神「今回はシリアスな感じになっちゃったかのう？」

零「そうだね。おじさんは感情表現が下手だからね」

神「そういう事じゃなからう」

零「いや、ズバリ重要なポイントかも知れない」

神「今回は盛り上げ役の由宇がいなかったからのう」

零「由宇って盛り上げ役立ってたんだ」

雷歌「主人公なんですけど…まあ、盛り上げ役かな？」

神「んで？次回はどうなるんじゃ？」

雷歌「それはですね、なんとあなたが…」

零「はい、ストップ。時間切れ」

神「このパターンもそろそろ飽きるのう」

標的16 見てたんだったら聞くな!

side リボーン

「頼んだぞ、ディーノ」

ツナの部屋に、リボーンの声が響く。

『OK。ああ、そういえば…』

電話越しに聞くディーノの言葉に、やはり、と思った。話を聞いた後、電話を切る。

「六道骸…先ずはコイツか」

side 由宇

「あーあ、言い訳考えとけば良かった…」

家（零の）でうなだれる。

「何で？バレてもいいよ？ボクは」

落ち込んでいる由宇に、零は不思議そうに言った。半分面白がっていただけ。

「だってさ…ヴァリアー来た時とか面倒じゃん」

「そんなのバレてた方が楽でしょ？」

「そうかな…」

零が慰めようとしてもなお、由宇は落ち込み続ける。

「そうだよ。先に言っちゃったほうが良いって」

「ううー…」

もはや零の言葉など耳に入らない。これから黒曜中の奴らがやって来るというのに…等と、すっかりこの世界に慣れきってしまっている。

『ハロー、なんか久しぶりじゃのう』

「どっから湧き出た、変人爺」

初めて姿を現した神にも、由宇はうろたえもせずに暴言を放つ。

『ひどいのう…せっかく姿を見せたのに…』

「別に見たくない！」

それどころじゃない！！と怒鳴りつけた。

『グスンッ…ところで、？デア？の方はどうかの？』

「…ああ、あれ？意外と役に立った、かも…」

由宇の声はそれを認めたくないように尻すぼみになる。？デア？
とはあの零に押し付けられた、メイド・バイ・神の武器《デア・デッラ・プロテツイ守護の女神^{オーネ}》のことである。

『そうか。ちなみにの、柿本千種が出てきたのはちよつとしたイレギュラーじゃから…』

「見てたんだな？見てたんだろ。見てたんだったら聞くなー！ー！ー！ー！ー！」

既に手のつけられない程にイライラの限界が来た。思うままに怒鳴りまくる、というか叫びまくる。ムカつくこの神に対してもそうだが、臨機応変に対応できなかった自分に対しても。

「ああ、もう！！何で有川由宇の経歴があんなメンドーなんだ！！
実在する人物のくせに！！！」

クッションとソファにあたりまくる。壊れそうになるまで。

『（実在しないんじゃないのう…）』

その日は近所から苦情が来ることも構わずに、ずっと叫び続けた。

零が困り果てたのは、また別の話。

そして、いつの間にか神がいなくなっていたのもまた別の話。

標的16 見てたんだったら聞くな！（後書き）

神「ホログラムっぽいけど実体化はどうだったかの？」

由「ホログラムだったら実体化じゃない」

神「…厳しいのう……」

由「そう言えば作者から手紙きてたんだけど」

神「話がとんだが、何じゃ？それ」

由「読んでみよう

『えー、こんにちは。作者です。

今まで言いたかったことを、面と向かっては言えないので手紙に書きます。

コホンッ、では

「きちんと次回予告してください。作者の望みはそれだけです」

ではさようなら』

由「……………」

神「……………」

由「これの所為で時間切れとか考えないのかね」

神「第一書きたいのならば書けばよかろう。わざわざ手紙にする必要は無いのう」

由「そうだね。ホント作者（雷歌）って馬鹿だね」

標的17 父です。

「今回の暴行事件、全部お前を狙ったのことだぞ。以前の並中ケンカの強さランキングに沿ってるな」

リボーンがツナに、不安を煽るような言い方で伝えた。

「ええ！？ケンカの強さランキングって…フウ太？そういえば最近見ないなあと…」

ツナは驚きながらも心配そうな顔で言った。ここは病院なので、あまり大声ではないが。

「だから、言ったでしょう？黒曜中の人たちだって。フウ太も多分捕まって…」

そこでリボーンと目が合った。やはり由宇を怪しく思っているらしい。その視線が険しかった。しばらく目を離さないでいると、リボーンが不意に目を離し、ツナに言った。

「とにかく、4位の草壁がやられたってコトは、次は3位の奴がやられるってコトだ」

「え、ええーと、3位は…ええええええ！！？」

今までに無いほどにツナは驚いていた。由宇は落ち着いて、言った。

「…獄寺君ですよ？そんなに驚くことじゃないでしょう？」

その言葉を聞いたツナは、違うとでも言うように首を振った。

「違うよ、由宇ちゃん」

「？」

妙にシリアスな声に、由宇は不思議がる。

「獄寺君は2位。3位は、由宇ちゃんになってる」

「え？嘘でしょ？3位は獄寺君で2位は山本君じゃ…」

驚きからベラベラと情報を口にしてしまった由宇に、リボーンは鋭く突っ込む。

「何故そう思ってるんだ？山本は、ケンカはしねえからランキングに入ってるんだ」

もう言い訳がたちそうにない。自分で墓穴を掘ってしまった。

由宇は諦めたくないように、唇を噛んで俯いた。しかしそこにフツと沸いて出た人物がいた。

「すまんのう…最近ちょつとしたイレギュラーが多くて」

驚くべきことに、姿を見せたのはあの、ことであろうかすべての元凶の神であった。

「何者だ？」

「誰！？このおじいさん！！…っていかどこから出てきたの！！！？」
「…何でここに出てくるの？」

それぞれがそれぞれの反応をし、同時に由宇の言葉を聞いてリボーンとツナは由宇を見た。

「……由宇ちゃんの、知り合い……？」

口を開いたのはツナだけで、リボーンはずっと由宇を見たままだった。その無言の視線が、身体にヒシヒシと痛い。

「え、えーと…このクソじ…人は、その…」

「由宇の父でーす☆」

…何ぬかしてんじゃこのボケ。由宇がそう言いたい所を我慢したのは、ツナたちの反応にあった。

「お、お父さん！？」

「! !」

さすがに神と言うのは、イタイ人に思われそうなので口を閉ざした。その代わりにっこりと笑って一言。

「そうなんです。父は、人間離れしたところがあって、みんな驚いちゃうけど」

この時の神の嬉しさを、由宇は知る由も無かった。

標的17 父です。(後書き)

零「ねえ、最近出番が少ないと思うのはボクだけ？」

由「別に良いんじゃない？」

零「ボクも出たいいいいい！！」

由「うるさい、駄々っ子」

？「そうだね。もうちょっと静かにしてくれないと咬…」

由「ストップ！！あ、あなたが何故ここに…」

？「もう黒曜編に入ろうというのに、作者が出してくれないからだよ」

由「…で、出たかったですか？雲雀サン…」

？「僕は別に群れたい訳じゃない。ただ目立ちたいだけだ」

由「…」

零「…」

由「…え？」

？「なに驚いているんだい？僕はただ…」

雲「君、何僕の変装しているのさ？ 咬み殺すよ」

？「…ごめんなさい…雲雀サン…」

由「で、誰なの？」

？「私の名は…」

零「はい、時間切れー」

由「そんな…」

標的18 おや？ストーカー？——お前がな

今、病院では数え切れないほどの並中生が入院している。

ハッキリ言って、病院にとっては迷惑なのである。

だがそれ以上に迷惑なのは…

「えええええええええええ！？由宇ちゃんのお父さんって事は、零のおじさん！？」

ツナが驚く。無理も無いだろう。だがここで、零の後に『くん』が付いてないのが気になった。そんなに仲良くなったのだろうか…

「由宇の父親か…確かに人間離れしているな」

リボーンは納得した。まあ、由宇自身も認めたので否定するとは思わなかったけれど。

だがクソ爺…もとい由宇の父（仮）も負けじと皮肉った。

「お主にはかなわんよ。（人間離れしているという意味で）」

さてリボーン。由宇の父Ⅱ神Ⅱラビの言葉の括弧の中の言葉を感じたことだろう。反撃に出ようと思ったらしく、口を開いたが、すぐに閉じた。零が来たからである。

「由宇！…あれ、おじさんなんでこんなところ居んの？」

「黙れKY。お前こそなんでここに居るんだ」

由宇は、既にラビを父と呼んだことにいらだっていたが、零が来た事によって更に機嫌が悪くなった。

「とにかく、3位の由宇ちゃんはここに居るわけだし、とりあえず大丈夫かな？ただ獄寺君のそこには行かないと…あれ？」

ツナがそう言ったところで、口を閉じた。そして新しく言葉を発する。

「由宇ちゃんのお父さんは？」

皆が全員振り返るが、どこにもラビの姿は無い。

「…不思議な人だね。何か、お父さんというよりはお祖父ちゃんみたいな感じだったけど…」

ツナが感想を述べる。確かに、父と言うには年を取りすぎだと思う。ただ、言ってしまった以上父とするしかないのだが。

「じゃあ、獄寺のところに行くか。どうせ学級閉鎖だろう」

リボンが言った。由宇たちのことは後にして、まずは黒曜中…骸のことが気になるのだろう。由宇にとってはその方が良いが。

ユウ…聞こえるか？ユウ…

「え？」

変な声が聞こえたので、由宇は思わず声を上げてしまった。それに皆が驚く。

「由宇？」

「どうかした、由宇ちゃん？」

「大丈夫か、由宇？」

由宇は「大丈夫」と言って皆の後に続いた。今は獄寺のところへ行くのだ。少し頭が痛むが、そんなこと気にしてられない。

だから後ろに居る柿本千種に気付かなかった。

「んー、可愛い女の子ジャン。能力は少しだけど戻ってきてるのか。
ふーん。あれが『迷宮の眠り姫』ラベリンスかぁ。結構俺のタイプだなあ…」

そう言っずつとユウを眺める。髪は蜂蜜色、瞳も同じ色をした、
見ためはモデルと間違えるほどカッコいい男。

「おや？」

視線の先の由宇の後ろに、怪しげな眼鏡の少年が居る。

「おやおや？ ストーカーかな？ ユウちゃん可愛いから」

自分も十分ストーカーらしいのだが、なんせ今居るのは空の上だ。
というか空に浮いてる。先ず彼女にばれることは無い。ばれちゃい
けないけど。

「じゃあね、ユウちゃん。またどこかで」

誰にも聞こえない、聞かれない言葉を残し、その姿は消えた。

標的18 おや？ストーカー？——お前がな（後書き）

由「で、後書きが前・後編っていうのも変だけど、アンタ誰？」

？「私の名は…」

雲「何でも良いから咬み殺す」

由「わ、わーストップ！ストップ、雲雀サン！」

雲「何？邪魔するなら君も咬み…」

由「…？」

雲「…」

由「…そんなにワタシをジロジロ見ないで下さい」

雲「…ユウ…？」

由「……………は？」

雲「…ユウ？」

由「……………へ？」

雲「…ユウ！」

由「……………はい？」

標的19 柿本千種——と城島犬

時は進んで進みまくって、黒曜ランド。

side ツナ

六道骸：一体どんな人なんだろう。死ぬ気弾もラスト一発。気を引き締めて：

「ツナ、ここで話しておきたいことがある。獄寺、山本、ビアンキもだ」

リボーンが、何やら重大そうに話し始めた。

「実はさっき、ディーノから連絡があつてな：

『おう、リボーン。六道骸のほうはどうだ？ ツナは大丈夫か？ ハッ。そうだ、実はな、頼まれてた？ アリカワレイ？ と？ アリカワユウ？ の事なんだが：その二人、ボンゴレ内には名前が無かった。だがな、もっと詳しく、名前ではなく特徴で調べたんだ。そしたら…』

と言っていた」

「ええ!! リボーン、ディーノさんにそんなこと頼んでたのか!？」

初耳だし、そんな必要がない。と思う。だがツナの反論に、リボーンは何も言わなかった。

「それで? リボーンさん、その続きは？」

獄寺君がすぐく気になる様子でリボーンに問う。きっとリボーンのことを信頼してるからこそ、何の疑問も浮かばないのだろう。

「その続きは…」

リボーンという言葉の続きを、今か今かと待つ獄寺君の唾を飲み込む音が聞こえる。

「知らねエ。それを聞く前にディーノとの連絡が途絶えた」

獄寺君のこける音は、漫画並みに豪快だった。

「…結局、お前は何が言いたかったんだ？」

ツナがりボーンに言った。リボーンの話の意図が分からなかったからだ。

「それはな、あの2人は気を付けた方が良いという事だ。現に今、こんなに大事な時にここに居ない。正式にファミリーに入れていない以上、由宇の方はしょうがないとしても、零がここに居ないのはおかしいだろ？」

その言葉には、どこと無く2人を信用していないリボーンの気持ちがかもっていた。

「来るぞ」

黒曜ランドの中に入って早々、リボーンが何かを察知したように言った。

その時、ガサガサッと茂みから音がした。

山本が踏んだ地面が、ミシミシッといって割れた。

side 由宇

「あんのクソ爺、勝手なこと言いやがって…どこ行ったあああああ
…！！！」

ツナたちと別れてから、零と2人で歩いている由宇は、辺り構わず叫びまくった。隣に居る零は、それをなだめる。

「まあまあ、しょうがないでしょ？（本当のことだし）助け舟出してくれたんだから」

その言葉を聞いて由宇は「うう…確かに…」と一先ず、とりあえず、仮に、納得した。

今の目的は、ヂヂとジジを止める事だった。どうせ城島犬は何とかなでる。M・Mも。ただしバースは別だ。というか、本人はどうってこと無い。このバースとの戦いでは、無駄な時間が過ぎるだけだ。それに、今はどうしてもリボーンに近づけない。だからこそ、ヂヂ&ジジ退治なのだ。

「並盛中、21B出席番号37番、有川由宇…ボンゴレの居場所、教えてもらう」

聞いたことのある声、ダルそうな喋り方。間違いなくコイツは…

「柿本千種！」

振り返るとそこには、柿本千種と城島犬が並んでいた。

標的19 柿本千種——と城島犬（後書き）

由「ねえ、これ後書きでしょ？何がしたいの？」

雷歌「え？あたしに聞いてる？」

由「他に誰が居ると？」

雷歌「い、いや、あたしにもよく分からなくて…」

由「作者のくせに」

？「私を忘れているな？」

由「あ、偽・雲雀。関係なくない？」

？「フッフッフ。実は関係あるのだ」

由「何に？どんな風に？」

？「それはだな、実はアイツは雲雀ではない！」

由「…で？」

？「…え？あ、そうだな……後は頼む！！」

零「は？え、ちょっと！..」

？「さらばだあ..」

標的20 何してんの！？空気嫁！！

何故か、由宇の目の前に柿本千種と城島犬が並んでいる。

「な、んで？」

驚愕から、ありきたりな言葉を発してみたが、思い出した。自分が3位なのだ、と。

「3位狩りに2人？おかしいんじゃない？」

由宇は《デア・デッラ・プロテツィオーネ守護の女神》を取り出す。零の方も、さほど驚いた様子はない。

「柿ピー怖がっちゃったから」

「……………」

城島犬が笑いながら言った。それに柿本千種は無言で否定した。由宇たちが何も言わずに居ると、城島犬は、こちらをジーツと見つめて言った。

「ねー柿ピー、コイツそんなに強いのかー？」

「…じゃあ犬、一人でやれば」

柿本千種は、吐き捨てるように言った。どこかすねているようにも見えて、なんとも滑稽な光景である。しかし城島犬は、その言葉

を待ってましたと言う様に前に出てきた。

「こんなの一人で十分らし。じゃあ3位はもらっちゃうびょん」

そう言って、城島犬は歯を付け替える。
みるみるうちに城島犬の姿が変わっていった。

「コングチャンネル」

「霊長目オランウータン科ニシローランドゴリラ…うわぁ、むさ苦しい姿だねえ」

零が、驚く様子もなく言った。むしろ悪口。零はそう言いながら制服のポケットから何かを取り出した。そしてそれを少しいじくった後、顔に近づける。

由宇からも城島犬からも柿本千種から、陰になってよく見えなかったが、零が取り出したのは多分…

「あ、警察ですか？何かここにゴリラが居るんですけど」

携帯電話。

その場に居る誰もが、零を眺めると同時に口を開ける。

「…なんで通報？」

そう言ったのは由宇だったが、城島犬も柿本千種もそう思っているだろう。

「…え？どんなつて、あ、黒曜中の制服着てます。…は？いえ、悪口とかじゃなくて…え、あ」

そんな言葉の後、零は携帯から耳を離し、一言。

「電話切られた」

「ねえ、アレはほんとかない？はつきり言って邪魔」

由宇は城島犬に言った。城島犬も納得。

「並中には変なのが多いびょん…」

そして由宇と城島犬の戦闘は始まろうとしていた。

零は…電柱の隅でいじけていた。

標的20 何してんの!?! 空気嫁!?! (後書き)

零「あ…」

由「ん? 何? 早く説明して」

零「だから…」

由「だから?」

偽雲「ユウ!」

由「雲雀偽物! 近づく、な…あれ?」

零「これはね、コイツの正体に意味があるんだ」

由「え? 何ソレ、どういう事?」

偽雲「そう。俺の正体は…」

由「正体は?」

零「ここでは発表できません!」

偽雲「という事だ。次回の内容を読んでくれ」

由「ここに来て次回予告なの!?! 何回の後書きを使ってるの!?!」

零「作者がウマシカだからねえ」

標的21 バグってますね？

気を取り直して、戦闘開始！

お互いが走り、お互いに近づいていく。由宇の武器は《デア・デッラ・プロテツイ守護の女神オーネ》。対する城島犬は《コングチャンネル》で戦っていた。

由宇は2mに伸びたデアを振り回して、城島犬の身体に当てる。だがコングチャンネルの城島犬には効かなかった。由宇は更にデアを振り上げた。その時ガシツとデアの先を掴まれてしまった。

「しまった…」

「もう終わりー？ ナンダ、やっぱ全然つまんないびょん」

逆に城島犬が腕を振り上げる。しかし、由宇がこれで終わるはずが無かった。由宇は教えられたとおり、武器の形をイメージしてみる。強く強く。すると、城島犬に掴まれていたデアが光りだし、その手をすり抜けて形を変える。

「んあ？ 何ら？」

「獣相手は、ライフルのが良かった？」

由宇はそう言った。その手には黒光りする拳銃を持って。

「ほへー。なかなかやるじゃん。んじゃ、オレも本気見せちゃおうかな」

そう言って、城島犬は歯を取り替える。

「チーターチャンネル」

ドンツと走り出す城島犬。由宇は何発か撃つが、外れてしまう。

「はずれっ」

急所ならば当てられる。しかし、原作を続けるならば城島犬の命を奪うことは出来ない。何とかして足を狙うが、一向に当たらない。その時、後ろから手を掴まれた。柿本千種だ。

「な、ずるい!!」

由宇はそう言って振りほどこうとするが、動けない。城島犬も近づいてくる。

絶体絶命

その言葉が頭に浮かぶと共に、目を閉じた。もうそこまで城島犬が近づいてるのが分かる。

ガッ

バキヤッ

ゴキッ

「キャンッ」

そんな音がして、恐る恐る目を開ける。倒れている城島犬、その横に立つ一人の男。それは――――

「ひ……ばり、サン？」

「ねえ、君たち何してるの？」

雲雀はピクピクと痙攣している城島犬をあとに、由宇の方――――
――柿本千種の方へ近づいてくる。

「……並盛中、ケンカの強さランキング第1位……雲雀恭弥」

柿本千種は、驚いたように少しだけ表情を変え、由宇の手を放した。その瞬間、柿本千種の手にはヨーヨー――――ヘッジホッグを構えていた。

だが、その努力も虚しく、雲雀のトンファーの前に倒れた。

「雲雀、サン？何でここに…」

由宇はデアを短い棒に戻し、ホルスターに入れる。雲雀に近づきながらそう問うた。

雲雀は少し間を空けて答えた。

「君を、助ける為だよ」

標的21 バグってますね？（後書き）

由「あの長い長い次回予告のくせして、結局訳分からず終わった…」

零「じゃあ、次回予告しようか」

由「うわー、本編でケーワイだったひとだぁ…」

零「ひどっ。だって僕は力ない少年なんだ」

由「うそコケ。原爆並みの力があるだろ」

零「両極端なんだ」

由「あ、そーですか」

零「信じてないね」

由「うん☆」

零「……………今回は…」

由「時間切れー。…一度やってみたかったんだよねえ♪」

標的22 はじめまして、

「君を、助ける為だよ」

———おかしい。明らかにおかしい。

由宇は雲雀と面識が無い。というか、まず、雲雀がこんなことするはず無い。大体「君を助ける為」とか、雲雀が人の為に動くはずが無い。たとえイレギュラーが起こったとしても、あり得ない光景と言葉である。

「…どちら様ですか？」

由宇は恐る恐る聞いてみた。見た目は完璧に雲雀であるため、ちよつと怖い雰囲気をもし出している。が、由宇が質問した後、明らかにあり得ない表情をした。

満面の笑み。

「やっぱりユウちゃん、分かっちゃう？」

雲雀のものではない声がした。姿も見見るうちに変わる。

「はじめまして。ソラでーす☆」

「あ」

蜂蜜色の髪が風に揺れて、キラキラ輝いている。顔はモデル並みに綺麗だ。

「あ」と言ったのは零である。どうやら顔見知りのようだ。

「ヨロシクねえ、ユウちゃん」

「は？」

そりゃもう超絶輝かしい笑顔でソラがそう言った。

「は？」と言ったのは由宇である。見知らぬ男に「ユウちゃん」と呼ばれる筋合いは無い。

「…なんでここに居るの、ソラ？」

今までぼーっと突っ立っていたであろう場所から、由宇たちの方へと近づきながら零が言った。

「へ？それはユウちゃんがこの世界に居るって聞いたから」
「は？ワタシ？」

ソラがさつきと変わらぬ笑顔のまま由宇の名前を出したので、とつさに間拔けな声が出てしまった。

「そ、君」

ソラが由宇の方に歩いてきて、腰をかがめて顔を近づける。間近にある綺麗な顔に、由宇は一瞬たじろいってしまった。

「ソラ、？ユウ？に何の用？言っとくけど、本人は何にも知らないよ」

由宇には零の言っていることが分からなかった。本人とはおそらく由宇の事。ならば何も知らないというのは何か。零はそれを知っているのだろうか。しかしその思考は結局意味を持たなかった。病院から続いていた頭痛が、更に増したのだ。何かを考えられる状況ではない。

「っっ…」

頭をおさえる由宇を、心配して零は駆け寄って来た。反対に、ソラはその場に立ったまま、クスクスッと笑っている。

「由宇に、何をしたの？」

零がソラを睨みながら言った。ソラの笑顔は変わらず、嘲笑には見えないほどの笑顔だ。しかし冷たく言った。

「何も。まあ、でも俺が原因かもね」

「何を…」

「レイ、俺は全部知ってる。？ユウ？がどんな娘で、父さんが何をしたのか」

標的22 はじめまして、（後書き）

零「最近、ラビを後書きで見かけないね」

由「ああ、何か忙しいらしいよ」

零「何で？」

由「自分の統治する世界、つまりワタシが居た世界が大変な事になってるらしい」

零「へえ…ラビも仕事するんだ」

由「仕事って言っても所詮ちょっと人の運勢を上げるとかでしょ（笑）」

零「それは神に対しての冒瀆だよ」

由「あれを神と認めていいのかな…」

零「んー、多分平気のはずだよ」

由「何かやだな…」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4016q/>

転生する話

2011年8月21日13時02分発行